

家族で今日も海に出る

新勝浦市漁業協同組合鶴原支所
中村 ひとみ

1. 地域の概要

私の住む勝浦市は千葉県南東部の太平洋岸に位置し、黒潮の影響を受けて冬は暖かく夏は涼しい快適な気候に恵まれ、大正時代から避暑地として知られている。また、海岸線は入り組んだリアス海岸と「日本の渚百選」にも選ばれた砂浜が広がる景勝地となっており、与謝野晶子や三島由紀夫などの文豪が数々の有名な作品を残している。勝浦市は古くから漁師町として栄えており、市の中心部にある勝浦漁港は千葉県第2位の水揚げ量を誇る。特に近海カツオの水揚げ量は関東で最大を誇っている。夏には県内外から海水浴やサーフィンなどで多くの観光客が訪れ、海を生かした観光業も盛んである。（図1）。



図1 位置図

2. 漁業の概要

私が所属する新勝浦市漁業協同組合は、平成9年に市内7漁協が合併して発足し、正組合員数462人、准組合員数1,318人の計1,780人で構成されている。主に10トン未満の小型漁船による釣り漁業が盛んで、立縄やひき縄、はえ縄などの漁法により、キンメダイやカツオ、マグロ類、マカジキなど多様な魚種を漁獲している。また、アワビやサザエ、イセエビ、ヒジキ、テングサなどを対象とした磯根漁業も盛んである。これらの漁獲物は品質の良さから高値で取引され、さらにアワビやイセエビ、キンメダイ、カツオは千葉県が全国に誇る千葉ブランド水産物に認定されている。

一方で、漁業者の高齢化が進み、担い手の確保と育成が急務となっている。またクロマグロの漁獲制限、スルメイカの記録的不漁や不安定なカツオの来遊、世界情勢の悪化による燃油高騰など、私たちの漁業を取り巻く環境は厳しい状況にある。

これまで、勝浦沖漁場を利用する御宿町から鴨川市までの小型船の漁業者で構成される千葉県沿岸小型漁船漁業協同組合は、全国に先駆け、半世紀以上の長きにわたり、キンメダイの資源などの状況に応じた管理に取り組んできた。厳しい状況にある中でもキンメダイの資源管理は功を奏しており、令和3年度千葉県資源評価において、資源は高位、増加傾向と評価されるなど、小型船漁業の経営を支えている。

3. 研究・実践活動の取り組み課題選定の動機

私は、勝浦市の吉尾地区で生まれ育った（図2）。家業である漁業は、祖父の代から営んでおり、

現在はキンメダイやカツオなどを狙う小型船漁業とアワビやサザエ、イセエビ、ヒジキなどを採る磯根漁業に家族で従事している（年間の操業スケジュールは表1のとおり）。

現在の家族構成は、父と私、妹、弟の4人であり、上京した妹を除く3人で漁業に従事している（図3）。両親は私が11歳の頃に離婚し、私たち子供は父方の元で育った。家事全般を担い生活を支えてくれた祖母と船団内でも腕利きの漁師だった祖父は、平成28年に他界している（図4）。



図2 勝浦市吉尾地区の位置

表1 わが家の年間操業スケジュール

漁業種類	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
キンメダイ立縄	▶			◀								
カツオ・メジヒキ縄	▨							◀				
イセエビ刺し網	▶			◀								
素潜り漁	▨											
タコツボ漁										◀		
採藻（ヒジキ漁）	◀											



図3 わが家の家族（左から弟、父、私）



図4 私と祖父

今回、私が漁師になった経緯や、漁師となってからの経験談について発表することで、漁家経営の一つの在り方として、漁業に就業されている方々や関心を持たれている方々に何かしら参考になる部分があれば幸いである。

4. 研究・実践活動の状況および成果

(1) 漁師になるまで

子供の頃から海水浴と言えば砂浜ではなく、親がトコブシなどを採取する横での磯遊びであり、毎日のように祖父や父が取ってきた魚介類が食卓に上がるなど、漁師の家に生まれた子供として、漁業の世界は当然のものとして身近にあった。

私は普通科高校を卒業後、飲食店で3年ほど働いた後、22歳のときに家業に専念することにした。これまで家業に尽力してきた祖父母が体調を崩し、父が漁業業務の全てを背負うようになったからだ。

祖父が携わってきた操業面での仕事はもちろんのこと、これまで祖母が担ってきた家事や経理、漁具の修繕などの細かい仕事まで含めると、父一人で抱えるのが困難であることは明白だった。当初、私は祖母が抜けた穴を補うつもりで家に入ったが、半年後には父と一緒に船に乗り、キンメダイ漁に出ている（図5）。

わが家の主力漁業であるキンメダイ漁は、資源保護と操業秩序の維持を図り、安定した漁場として永続させることを目的とした「勝浦沖キンメ操業規約」を厳守しなければならない。規約では、乗組員1人当たり道具は1本までと決まっているため、乗組員が父と私の2人になれば、道具を2本使うことができ、父一人よりも多く漁獲できる。だから父が「一人だからどれだけ努力をしてもたくさんの魚を取ることはできない」と弱音をこぼした際に、「じゃあ、弟が学校を卒業するまで私が乗っていこうか」と軽い気持ちで口を滑らせてしまった。

その一言を転機に、父はあっという間に船や道具の準備を済ませ、私は翌日から父と共に出漁していた。乗船して早々に水揚げ高が上がり、以後、私は年間を通じて全ての漁に従事するようになった。

（2）漁師になってから

弟が海上技術学校を卒業して跡継ぎとして家に戻ってきたら私は船を下りるつもりだった。しかしその間に祖父母が他界し、家の中も慌ただしく、がむしゃらになって働いているうちに、気づけば8年が経過、私は30歳になった。家族で漁に出る日々は充実していたが、私が乗船した当初から、漁家経営に対して漠然とした不安を抱えていたのも事実だ。この8年の間に不安の一つ一つと向き合ってきた。「生涯を通じて」と言える勇気はまだないが、これから先も長く家業に従事して、家族を支えていきたいと思えるようになった。

（3）Win-Winな漁家経営を目指して

①一個人としての自立について

イセエビ刺し網漁やカツオ・メジひき縄漁、キンメダイ立縄漁などは父が主体となっている漁なので、どうしても自分が釣り上げたという感覚にはなりにくい。極端な言い方をすれば、船頭の腕が良ければ、乗組員が誰であっても魚は釣れる。一方、素潜り漁はほかの漁に比べると個人の力量による側面が強いので、アワビがたくさん取れたときは「自分で取った」という手応えを感じることができ、私が最もやりがいを感じる漁だ。今は父が潜る場所まで操船してくれている



図5 私が釣った
キンメダイ

が、海のさまざまな状況下に合わせて潜るべき場所に船を掛けることは、経験と技術が必要だ。プロッターなどの機器類は付いていないのに父は必ず同じ場所に船を掛けることができる。漁師はこれを「山を見る」という。ここまでできないと一人前とは言えないので、やはり素潜り漁でも父の力は大きい。

私も令和元年に一級小型船舶操縦士免許を取得した。いずれは私一人で操船して、今と同じだけアワビを採れる海女になることが直近の目標である。

漁家経営において女性は補助的な役割にまわる場合が多く、私も例外ではない。漁師として半人前で、何かあったときの不安は大きい。父や弟に頼らず、私一人でも収入を得ることができる漁は貴重な。今後も経験を積んで、素潜り漁のほかにも、自分一人で操業できる漁についての可能性を深めていきたい。

また「漁師」という枠組みから一度離れて、料理が好きだったことから調理師試験を受験し、免許を取得した。自分で何かに挑戦したいという気持ちは、これからも持ち続けていこうと思う。

②役割分担について

小型船1隻、船外機船4隻を所有しているわが家では、船体やエンジントラブル、機器の故障は日常茶飯事で、使う側にも少なからず専門的な知識を必要とするため、こういった場合は父や弟が主導している。同じく専門性が求められる経理を私が担い、役割分担することで仕事は効率良く回っている。この役割分担における労力の比率に偏りが出ないように、普段からお互いに手持ちの仕事を気にかけるようにしている。

③リスク管理について

父はこれまでに風評被害などによる値崩れ、漁獲高の減少、漁労に必要な燃油や物品の高騰などをいくつも経験してきたことから、備えを怠らない。一つの漁が駄目になっても、すぐほかの漁に挑めるよう、今は廃業してしまった人の多い漁法の許可更新も続けている。主要な漁が不漁だったのをきっかけに、平成27年度から数10年ぶりに、タコツボ漁を再開した。わずかではあったが、水揚げできたのも許可の更新を続けていたからだ。そして父の漁師としての経験と技術、知識がなければ、許可があっても漁をすることはできなかったはずだ。祖父から父へ、父から弟へ、一子相伝の教えを受けている弟が、まずは一人前の船頭になるまで支えてくれたらと思う。

また、私が経理を任されるようになってからは、小規模企業共済や中小企業倒産防止共済にも加入した。漁の面では父と弟が、金銭面では私が、それぞれが異なる観点から入念なリスク管理をすることで、より安定した暮らしに近づけていると感じる。

5. 波及効果

父と娘で始まった親子船だったが、途中で弟が加わり親子3人乗りになることで、後継者離れが進む地元では少しばかり話題に上がることが増えたそうだ。

隣の御宿町では、昔は女性による素潜り漁が盛んだったと聞く。私たちが営んでいるイセエビ刺し網漁やキンメダイ立縄漁においても、昨今はご年配の方々が多いのは確かだが、夫婦船での操業はさほど珍しいことでもない。このように地元では昔から女性漁師に寛容であり、私が船に乗り始めたときも、周囲から暖かく見守っていただけたことは今でも感謝している。

操業面では、近年では機械化が進み力仕事が軽減されたとはいえ、慣れないうちは指が擦り切れて血がにじむこともあった。周りには80歳代の現役で漁師をされている方も多く、私が泣き言をこぼすと父から「年寄りにできてお前にできないのか」と叱咤された。そのとおりでと妙に納得して、ただ地道に漁に励んでいる(図6)。



図6 イセエビ刺し網の修理

私や弟が漁師になってからは、同じ地区で後継者として船に乗る若者が2人増えた。弟の同級生には漁師を親に持つ人が多く、自分は家業を継ぐ気があったのに親に反対されたという話をたびたび聞く。漁師の親ほど、こんな苦勞に耐えられるだろうか、もっと安定した収入が得られる仕事に就いてほしいと、跡を継がせることに不安を感じているようである。今後、私たち若手漁師の存在をきっかけに、就業と明るい未来のある漁業への可能性を見出してもらえたらと思う。

6. 今後の課題や計画と問題点

(1) この先の漁業について

身体が資本の職業なので、家族の健康はもちろん、私の気力、体力がどこまで持つかは少し気がかりだ。また、父が中核的漁業者として認定され、今年度末から水産業競争力強化漁船導入緊急支援事業(浜の担い手漁船リース緊急事業)で小型船の代船建造が始まる予定である。しかし新しい船で用いる備品や機器類などは物価高騰や半導体不足の影響を大きく受けるため、先々に不安が残る。

勝浦市内で取れる魚介類のブランド化に向け、市や漁協、漁業者が連携して取り組んだ結果、「外房つりきんめ鯛」や「外房あわび」など私が取っている魚介類に高値が付くようになった。その一方で、市場に水揚げしても安値で取り引きされる魚介類も多い。ほかにも近年のクロマグロ漁獲規制や、スルメイカ、カツオなどの記録的な不漁により、父と祖父で営んでいた頃の操業スタイルでは食べていくことが難しい。そのため、夷隅(いすみ)、安房(あわ)地域(御宿町~鴨川市)の漁業者は、漁獲量、金額ともに安定しているキンメダイ立縄漁に集中せざるを得ない。その貴重な収入源であるキンメダイは国がTAC管理の検討を進めているが、私たち漁業者が所得向上を目指すためには、引き続き資源管理の取り組みを継続するとともに、多種多様な漁法を組み合わせた操業方法の多角化や安値で取引される魚介類の鮮度保持や販売促進に取り組み、魚価の向上を図らなければならないと考えている。

(2) 地域の高齢者について

イセエビ刺し網漁は、網からイセエビやサザエなどを速やかに外すため、人手が必要であるが、どこでも人手不足に悩んでいると聞く。わが家ではイセエビ刺し網漁の時期には、近所の人が「手伝い人」として働きに来てくれるが、その方々も後期高齢者と呼ばれる世代である(図7)。いつまでお願いできるか分からない状況にあるが、皆さん勢いのある方々ばかりで、中には現役引退後に地元に戻り漁を助けてくれる人もいます。わが家にお集まりいただき皆さんも、「来年は生きていくか分からないけど」な



図7 手伝い人の皆さん

なんてにぎやかしく冗談を飛ばしながら、午前3時から網に掛かったイセエビや魚を外したり、ゴミ取り作業をしてくれる。漁業の働き手というと若者に注目されがちだが、引退後の方々は、既に社会でさまざまな経験を経ているため、頼もしく、気持ちよく働いてくれるありがたい存在である。若い人たちが集まる街があるのだから、元気なお年寄りが集まる街も魅力的だと思う。現在は過疎化が進んでいるが、お年寄りが元気に生きる漁村としての今後に期待している。またお年寄りとお若い担い手と一緒に地域を盛り上げていくことも必要だと思う。

(3) これから先の家族のこと、私のこと

将来的に、弟が所帯を持つなどすれば家族の形は変わっていくだろうし、私の役割にも変化が出てくるだろう。そのときは誰がどういう役割を担うのか、家族と話し合いながら臨機応変に対応していきたい。

私自身はライフプランに結婚、出産、子育てを盛り込まない働き方でここまできたが、自分の体験を踏まえた上で、後に続く女性漁業者が、出産や子育てを経ても安心して長期にわたって働ける環境づくりを模索していきたい。また、その環境づくりを進めるためには、行政や関係者の助けも必要だと考えている。協力してくれる地域の方々を大切に、これからも家族一丸となって、たゆまぬ努力で頑張っていきたい。